20240114 レムナント教会１部

納得いかない十字架(マルコ 15:33-37)

神様の恵みによって救われて教会に通っているものの、何かしら条件や環境、状況などに流されて騙されることがしばしばあります。それはなぜかと言いますと、救われたにもかかわらず自我が生きていて、結果、自分の考えに囚われているから、そういうふうになってしまいます。そうならなくてもいいし、打ち勝って勝利できる身分に変えられているにもかかわらず、自分の考えに囚われると流されて騙されてしまうことになります。もしその信者が十字架の奥義を正しく悟るようになったとなれば、その時から自分を否定して神のもので新しく始めることができるようになります。それで流されることなく勝利できるようになるでしょう。今日の聖書の箇所を見ますと、イエス様が逮捕されて死刑を宣告された後、言葉に言い表すことができないほどの侮辱を受けてののしられ、あざけられて、いよいよ十字架にかけられて死なれるそういう場面です。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫びながら息を引き取られました、ということが書かれている場面です。この画面、この聖書の箇所を通して私たちに神様が語られるメッセージをしっかりと心に刻んでいきたいと思います。

1. 罪人の救い(神の愛)の他に十字架を説明出来る道はない。
まず第一に、罪人の救い、つまり神様の愛の他にイエス様の十字架を説明できる道はありません。これがメッセージです。

1) 誰にも納得出来ない十字架-バラバ、ローマ兵のあざけり、群衆の侮辱
つまりイエス様の十字架というのは、誰にも納得できない出来事だったわけです。先週も申し上げましたように、殺人強盗の脅迫犯バラバよりもひどい扱いになりました。納得できますでしょうか。それから今日の聖書の 18 節から 20 節の間を見ますと、ローマの兵士が王様のような衣を着せ、いばらの冠をかぶらせて、頭をたたきながらつばをかけて、それからイエス様の前にひざまずいて「ユダヤ人の王さま。ばんざい」とあざけりながら侮辱しました。ローマの兵士がそのようにイエス様のことを侮辱したということは、「あなたがユダヤの王なのか。あなたがキリストなのか。ならばこれはありえないことでしょう」と言いながら、ふざけるなと言っているわけです。それから 29 節から 32 節の間を見ますと、そこにいた群衆、また通りかかっていた人々が、「あの人は神殿を壊して三日で建て直すと言っていた人じゃないのか。あの人は自分でキリストと言っていたでしょう。多くの人を救うと言っていたのに、自分のことは救うことができないのか。いまあの十字架から下りてきなさいよ」と言いながら詐欺師扱い、あるいは異常者扱いをしていました。ふざけるな。何がキリストなのかという侮辱だったわけです。このようなローマの兵士によって、またユダヤ人の群衆などによる侮辱ということはよく考えてみると、当たり前で正常ではないでしょうか。彼らから見たときには、ユダヤ人の王なのにこんなに弱々しく、また悲惨に十字架で死ぬというのはあり得ないです。だから今ふざけてるでしょうと。それからユダヤ人が見たときに、キリストならばあのような十字架というのはあり得ないのです。彼らの基準、彼らの考え方から見ると、それは絶対ありえないことです。なのに今、現実目の当たりにしているのです。なので、ふざけるな。何がキリストなのか。何がイスラエルの王なのかと侮辱をしているわけです。

2) 人間側にない理由-Ｉコリント 1:18、23、ニコデモ
だからイエス様の十字架というのは、人間の方から見ると絶対納得できません。人間の方にはイエス様が十字架で死なれるという理由が見当たりません。それでパウロもコリントの手紙でこのように言いました。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」。それからＩコリント 1：23 にも「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが」。そのように言っています。それが人間側から見たときには当たり前ではないでしょうか。イエス様がユダヤ人の指導者で律法学者、聖書に精通していたニコデモにもこのように言いました。人が新しく生まれなければ神の国に入ることができません。その時にこのニコデモは人間がどうして二度生まれることができるのでしょうか。母の胎に入ってもう一回出てくればいいでしょうかという反応をしていたわけです。納得できません、理解できないことなのです。それがイ

エス様の十字架です。つまり、人間が持っている何かでイエス様の十字架を理解しようとすると、イエス様の十字架にアプローチしようとすると理解出来ないしつまずくだけです。なぜかと言うと、イエス様の十字架は神様の理由によって成し遂げられたことだからです。その神様の理由は神様の願いです。

3）神様の理由（絶対願い）-創世記 3:15、ヨハネ 3:16、ローマ 5:8
神様は、人が罪を犯して地獄の運命にとらわれそこから出られない状態の時、その罪人を救う為に約束されました。「女の子孫が生まれて蛇の頭を踏み砕く」と。その為に、「女の子孫はかかとに噛みつかれる」言われます。キリストが十字架で死なれることをおっしゃったのです。つまり、罪人が救われるのは十字架の他にはありえないので、最初からそれを言われました。
それはヨハネ 3：16 を見ても「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」とあります。それ以外には説明できません。人間には自分が罪人で救われるべきだという概念がないので、イエス様の十字架をはなから理解できません。ローマ 5：8 にも「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」と書いてあります。イエス様が息を引き取る時に叫びました。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。そのときに父なる神様は何も返事などしないでと無返事だったわけです。それはなぜだったでしょうか。人間的な言葉で分かりやすく申し上げますと、イエス様がなぜわたしを捨てられるのですかと聞いたのは、理由がわかっていないから、今その理由を聞きたいから聞いてるわけではありません。すべてご存知の上で身代わりとなられました。でも、あまりにも苦しいから、それは人間の私の方からはイエス様の心境を測り知ることはできませんけれども、それで叫ばれました。その時に父なる神様が何も答えられませんでした。なぜなのでしょうか。一つのほかに答えがないからです。たぶん何も言ってないというのは、父なる神様がイエス様に向かってわかっているだろう。罪人が救われるためにその道のほかには道がありません。たぶんそういうふうな意味が無返事の中にあったのではないでしょうか。それからイエス様が「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と聞かれたのは、言葉を変えますと私達に向かって「あなたがたはなぜ私が十字架で死ぬのかわかっているのか」と叫んでいらっしゃるようなフレーズでもあります。つまり罪人が救われること、その他に理由はありません。だから神様は何も喋らず黙っていらっしゃいました。神様の絶対願いなのです。罪人が救われるということは。これこそがイエス様の十字架を理解するための唯一の答えなのです。他は何を持ち出しても理解することなどはできません。人間の方からいかなる思想やいかなる法則、また理論、常識などを持ち出しても、イエス様の十字架は理解できません。道徳や倫理のさまざまな理由を持ち出してもイエス様の十字架は理解できません。けれども、教会に通っていながらも、そのような世にあるもの、人間にあるものを持ち出してイエス様の十字架の前に立つので、イエス様の十字架が自分のものにならないし、十字架に飛び込むことができないわけです。だから、今日のこの聖書を通して、改めて罪人の救い、神の愛のほかにイエス様の十字架を説明することはできない。罪人の救い、神様の絶対願い、これ以外のすべてを全部下ろして、これだけでイエス様の十字架にアプローチしなければなりません。

4）十字架の前での人間否定（ピリピ 3:8）
それでイエス様の十字架の奥義が本当にわかったときに、その前で人々は自分を否定して人間を否定することになります。それがパウロのこのような告白の中にあるものなのです。ピリピ 3：8「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています」。どのような理論、どういう経験、どのような思い、どのような思想なんでしょうか。それが要らないという意味ではありませんが、イエス様の十字架を理解することにはこれっぽっちも役に立たないものなのです。でも残念ながら私たちはそういうものに生まれながら染まってきたものなので、ついついそれを持ってイエス様の十字架の前に立とうとするので、なかなか十字架に飛び込むことができないのです。

改めて申し上げましょう。罪人の救い、神の愛の他には、イエス様の十字架を説明することは不可能なのです。

2. 罪人の救い（神の愛）の他に信者の人生を説明出来る道はない。

そして、ここから今を生きる私たちにもう一つのメッセージがあります。罪人の救い、神の愛の他に、信者、自分の人生を説明できる道もありません。皆さんの人生をどういう風に解釈しているのでしょうか。その解釈によって心に高慢が残るか、傷が残るかになるわけです。信者でもそれぞれ人生 story というものがあります。ある人は自分で選んで生まれたわけではないけれども、生まれてみたら親がとても変な親の場合もあります。虐待される場合もあるし。ひどい場合は親に捨てられる場合もあります。それが心の傷や恨みになるでしょう。

1）自分の救い-人生ストーリー、親への恨み、人への失望、病、災難、失敗と過ち、不安と精神的トラブル…

しかし、信者の場合は、罪人の救い、つまり自分の救いを基準にしてそれを解釈しないといけません、それは親がどうのこうのを考える前に、人間の本当の親は人をお創りになりました。創造主の神様だけなのだよということに気づいてもらって、その神様が自分の親になるための唯一の道、罪が赦されて神の子どもになれる唯一の道キリストに向かわせるために許されたものなのです。罪人の救いを基準にして自分の人生を解釈しないといけません。ある人は人に裏切られる経験、また人に無視される経験、あるいは人にがっかりする、人に失望するような経験などをする場合があります。それで人に対しての不信感が募って、対人関係に問題が生じる人も少なくありません。それは解釈が間違っているからです。信者は罪人の救いを中心にして解釈しないといけません。それは人間には頼るところがありません。人は頼る対象ではなく、私たち人間が真に頼るべきところは創造主の神様だけなんだよ。その真の便りとなる創造主の神様と出会うための道、キリストに向かわせるために許されたプロセスなのです。罪人の救いを中心にして解釈しないといけません。ある人は願ってもない病にかかって煩う場合があります。なんで私だけがこんな病と思うようになるでしょう。つらい思いをするかもしれません。しかし、それは嘆くための問題ではなくて、もし人間が本当にこの肉体、体だけならば、なんとむなしいことでしょうということに気づいて、人間にはたましいがある霊的な存在だということに気づいて、そのたましいにいのちが与えられるための道、キリストと出会うための神様の配慮なのです。罪人が救われるために、まず自分が救われるために、神様はさまざまな人生ストーリーを許されました。なのに、それを知らないで心の中に傷を抱えて、恨みつらみをもって人生を生きてるので、つまずくようになるしかないのではないでしょうか。時には本当に愛してるものが亡くなったり、あるいは失ったりする場合があります。その悲しみの余り、人生そのものが暗く見えて、何もかもが否定的になる場合があります。そのために許されたものではありません。人間にとって、人生にとって一番大切な宝は何なのかということを改めるための神様の導きなのです。なのにそういうことで「神様なんかいないよ」と。神様が愛していらっしゃるからそのような試練も許されるわけです。また、自分の何かとは全く関係なく、何かの災難に遭って災害の被害を受ける場合がありま。大変でしょうけれども、そのことで崩れていくための内容ではありません。この世に真の希望などはありませんということに気づいてもらって、私たちの本当の希望は永遠の天国そのものなんだ。その永遠の天国の御国の国籍を得るための道、キリストを信じてもらうために許されるものなのです。この世はいつかは終わります。世の中に永遠になるものは一つもありません。すべてが変わるものなのです。また、自分の弱さや他のいろいろな要素によって失敗をしたり、過ちを犯したり、あるいは犯罪に手を染めたりする場合があります。なぜなのでしょうか。それは自分という人間には希望など一ミリもない。徹底的に絶望して私の希望はキリストの他にはありませんということに気づいてもらうための出来事なのです。罪人の救いのほかには自分の人生を説明することは無理なのです。何かしら不安で、不安がエスカレートすると精神的なトラブルにつながります。なぜそういうことがあるのでしょうか。それは人間に本当に必要な真の平安と安らぎは、自分自身にもこの世にも人間にはありません。真の平安は創造主の神様のほかにはありませんということを教えるための内容なのです。その神様と出会い、真の平安の主人公になるための道、わたしはあなたがたに平安を残します。わたしがあなたがたに与える平安は世が与えるものと違う。その平安の安らぎの安息の主であるイエス・キリストと出会うための道なのです。自分の人生ストーリーを罪人の救いを中心にして説明するようにしないといけません。

2）他人の救い-使命への土台、ミッションへの材料、CVDIP

そして、その自分の救いに留まりません。これから他の人が救われる、他の罪人の救いのために用いられるように人生ストーリーがあったということを確認しなければなりません。今まで申し上げましたように、親に対してのさまざまな感情というものは、同じく親に対しての悲しみやさびしさ、うらみなどを持っている

罪人を救うために私たちに経験させたものなのです。罪人の救いのために。人にがっかりして失望している対人関係に問題がある人は、そのようなことを抱えている罪人が救われるために私に道具として許されたものなのです。なのにそれを傷としてずっと抱えているのです。それがミッションに変わらないといけません。ミッションに変わらない限り、その人がそれを喋るか喋らないか関係なく、心の傷としてその人を捉えて悪魔サタンに操られる道具になります。癌になるのです。霊的ながん。神様はミッションのために他の人が、他の罪人が救われるために許されたものなのに、その解釈ができないので。病を経験しましたか。病を経験している罪人の救いのために災難を経験したのでしょうか。災難を経験している罪人が救われることのために失敗と過ちを経験したのでしょうか。今も失敗と過ちを経験してさまよっている罪人が救われることのために、私たちが先に経験したものなのです。不安と精神的なトラブルで悩んでいるのでしょうか。今も不安と精神的なトラブルに悩んでいる人々、その罪人が救われるために私たちが先に経験しただけのものなのです。なので、自分の人生ストーリーは使命への土台なのです。ミッションへの材料なのです。そのような内容を正しく整理したもの CVDIP と言います。皆さんがいくらひどい経験、悲しい経験をしたのかわかりませんが、それが皆さんをほかの罪人が救われる使命と推している内容なのです。推しです。最近、推しということが結構流行っているのですが。ミッションの推しなのです。

3) アン・サリバン
アン・サリバンのお話はご存知だと思います。精神的な問題を抱えて入院されて、そして献身的なケアを通してキリストと出会い、癒されることになりました。自分の人生を振り返って、なぜそんなにひどい目にあって悲しい人生を歩いてきたのか。なるほど、そのように患っている人がたくさんいるから、誰かが先に経験して彼らを理解して、彼らに真の救いをお話しないといけないから、精神病院に看護師として就職し、そこからヘレン・ケラーのような人が生まれたわけです。あるアメリカの長老さんとその奥さんは二人とも牧師の子どもでした。それで小さい時から良い信仰生活をしつつ社会的な地位も得て、いわば無難な家庭でした。ある日、次男当ての宅配がきた時にお母さんがそれを開いてみたら、女装のためのいろんな道具がそこに入っていました。お母さんはビックリしてお父さんに相談しました。すぐ騒ぎたてないで、そういう品性を持っていらっしゃる方だったので、その長老さんは１秒も迷わずに「なるほど、そういう人間達をこれから助けるための勉強じゃないの」と言ったみたいです。それは子どものことを軽く見るという意味ではありません。罪人の救い、神の絶対願い、この他に信者、自分の人生を説明しようとしてはいけません。それは悪魔に騙されることになります。心の傷を抱えるだけなのです。何か心に嫌なものが残るだけなのです。イエス様の十字架の前でイエス様を侮辱しているローマの兵士や群衆などを通して、イエス様の十字架は罪人の救いのほかには納得できない。だから私の救い、罪人である私が救われることの他に自分の人生は説明することは無理だし、してもいけません。何の得もありません。ということを改めて確認しましょう。

それでイエス様の十字架の前に立って、罪人の救いと神の愛だけでアプローチしましょう。自分の考えによる迷いと疑いなどを全部捨てて、十字架に思いっきり飛び込んで行きましょう。そこからスタートなのです。なぜ教会に通っているのに信仰生活がなかなか喜んで積極的にできないのでしょうか。心をオープンにしてできないのでしょうか。飛び込んでいないからです。十字架が自分のものになかなかならないからです。

それから罪人の救いをテーマにして自分の人生を編集しましょう。今申し上げましたように、正しく編集できた場合に残るのは感謝のほかに何も残りません。いくらひどいことがあったとしても、いくら悲しいこと苦しいことがあったとしても、いくら自分の弱さ、失敗があったとしても、全部感謝に変えられて感謝しか残りません。感謝しか残ってない人に生まれるものがミッションです。聖書には信者に聖霊の力によって証人となると約束されているのに、その約束と私とはなぜかけ離れているのでしょうか。その間に一番大切な言葉がミッションなのです。ミッションに気づいていないからです。神様はひとりひとり全員にミッションを持って召されました。でも十字架に飛び込んでいないので、ミッションにまだ行けないのです。引っかかるものがまだ多いから。気になることが多いから。何を食べるか飲むかが多いのです。自分の王座をどうやって守れるか、そういうことばかりなのです。十字架の奥義の前に立っていないからです。それで感謝だけが残って、そこから生まれるミッションだけを持って自分の人生をまとめるようにして行きたいと思います。そういう静かな時をぜひ持ってください。

それで 2024 年、自分を通して罪人の救いの働きがなされることを信じて祈りましょう。皆さんはそのために召されているわけです。それが充分可能になるように神様が約束してすべてを備えていらっしゃるのです。ただ私たちに必要なのは信じることです。皆さんがそれほどすごい存在に変えられていることに気づいてもらえないように、サタンは過去に私たち捕らえてしまいます。十字架から新しく全部始めようとせずに、ずっと何かを引きずるように悪魔サタンは働きかけているのです。だから 2024 年、私を通して罪人が救われる働きがなされるんだということを信じて、それが当たり前だと祈ってください。その契約を握って元旦のメッセージを思い出して、永遠なる相続を待ち、そして集中による永遠なる作品を残して、永遠なる遺産に挑戦する。のような 2024 年にしていきましょう。

（祈り）
恵み深い父なる神様。ありがとうございます。ここに集っている兄弟姉妹のためにイエス・キリストが十字架で血を流されて死なれました。そして、完了なさったイエス様が復活なさって、今、礼拝を捧げている私たちに御座の祝福をもって臨んでいらっしゃることを覚えて主の御名をほめたたえます。しかし、この祝福が自分の考えに囚われて邪魔されることがありますので、十字架の前に正しく立って、その十字架の奥義を悟り、罪人の救い、神の愛だけをもってアプローチして、自分の人生を編集し、残りの生涯、神の約束の力による証人の道を歩くことができるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン。